伊勢物語

作者

作者は未詳。古来諸説があるが、その代表的なものは以下のとおりである。(1)業平の自作（「袋草子」「流布本奥書」）、(2)伊勢の作（「流布本奥書」）、(3)業平の自記に伊勢が補筆（「和歌知顕集」）、(4)業平の遺稿を近親者が整理補筆（「伊勢物語注」）、(5)業平の日記に後人が増補（「彰考館蔵伊勢物語鈔」）、(6)在原一門の作（「和歌浦鶴」）「考証伊勢物語詳解」）、(7)紀貫之の作（折口信夫）、(8)具平親王の撰（「真名伊勢物語」に六条宮撰とある。橘守部）。

(1)(2)(3)は古くから唱えられているが、江戸時代に賀茂真淵により否定された。池田亀鑑著「伊勢物語に就きての研究　研究篇」によると、「もし、強ひて編者の名を求むるならば、やはり業平に最も関係の深い人、即ち在原一族の人々によつて成されたものとするのが穏当であらう。」とある。現在では、段階的に複数の作者の手に成るもの、とする説が有力である。

出典

▼底本

新日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語」（秋山虔校注、平成九〔一九九七〕年、岩波書店）によった。新大系本の底本は学習院大蔵定家筆本を用いている。

▼諸本

「伊勢物語」は異本が多く、池田亀鑑著「伊勢物語に就きての研究　校本篇」によれば、四十三種を五系統七類に分類している。(1)定家本（a天福本、b武田本、c流布本）、(2)古本、(3)大島本、(4)塗籠本、(5)真名本に分かれる。天福本は、天福二（一二三四）年定家七十三歳のときに書写したもので、最も信頼できるものであると言えよう。

▼書名

「伊勢物語」は歌物語で、一巻から成る。「伊勢物語」という書名は、古く「枕草子」七八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」の条や「源氏物語」絵合巻に見える。また、「源氏物語」総角巻に「在五が物語」、「更級日記」に「在中将」、「狭衣物語」に「在五中将の日記」などとある。いずれも「在原氏の五男、近衛の中将業平の物語」という意味で名付けられたものである。

「伊勢物語」の名称についても諸説があり、(1)伊勢の作または補筆からとする説（「愚見抄」「直解」「拾穂抄」）、(2)「ひがごと物語」の意味だとする説、当時の諺に「伊勢人はひがごとす」とあったことより生まれたと考えられたもの（「袋草子」「古今集註」「童子問」）、(3)「男女の仲らいを書いた物語」とする説、「いせ」は「妹夫」で男女の仲らいを言う（「伊勢物語題号考」）、(4)

「似而非（えせ）物語」の音転とする説（加納諸平ら）、(5)「昔、男」が伊勢の斎宮に使いする六十九段が全編文中最も注目されるからとする説（「童子問」「古意」など）、(6)原本では伊勢斎宮の記事が巻頭にあったからとする説（「袋草子」「童子問」「考証伊勢物語詳解」など）。これらの説の中では、(5)(6)の、六九段が愛の物語である「伊勢物語」の中心をなすという説は説得力があるが、他の平安朝物語の「落窪物語」や「源氏物語」などのような、その理由の判然とした書名に比べて、断定しがたい。

▼成立

成立時期は不明である。家集形式の「古本業平集」が原型で、他の説話や歌が加えられ、次第に業平の一代記ふうに説話化されていったものかと思われる。あるいは、「古今和歌集」成立の延喜五（九〇五）年以前かと推定されるのは、「枕草子」や「源氏物語」に「伊勢物語」という名称が見られるからである。ただし、現存の形になったのは、「後撰和歌集」の天暦五（九五一）年頃かそれ以後のことであろう。

▼内容

伝本によって異同はあるが、歌を中心にしたおよそ百二十五段の小話から成る短編集である。各段とも多く「昔、男ありけり」で始まり、各小話の中に一首または数首の歌が出てきて、その多くが在原業平の歌である。また、話の中に出てくる事柄も、明らかに業平のことであると推定されるものが多いことから、「男」とは、業平をモデルとしているものと思われる。また、全編はこの「男」の「初冠」から「辞世歌」まで一代記のような構成をとり、統一感をもたせている。

およそが年次を追って構成されており、また、その中にはグループのようにまとまった段も見られる。例えば、二条の后（三〜六段）、東下り（七〜九段）、伊勢斎宮（六十九〜七十五段）、昔男の歌才（七十八〜八十一段）、惟喬親王（八十二〜八十五段）などの物語である。しかし、反面、全体の物語の脈絡は緊密とは言えない面も多い。「昔、男」という不特定人称によって、一個の人間では体験しえない多面的な人生が次々と語られている。

「昔、男」の生涯を記すという統一感をもたせ、歌によって実在の業平の情熱を印象づけながら、多面的な人生を描き、「みやび」の精神を具体的言動に即して追求していると言えよう。

主題は、三分の一以上が男女の恋愛談である。そのほか、親子・主従・友人間の様相や、宴会・旅行・述懐なども取り上げられている。それらの小話には、美しい「まこと」の心と「みやび」の精神が表れている。

▼表現

文章は短句の積み重ねによって、簡素素朴で、かつ、優雅である。語意の用法の平淡さや、文脈の論理的な明快さを欠く点はあるが、情景描写の的確さや余情あふれる表現などが、それらの欠点を補ってあまりある。後の物語はこの物語を範とし、歌人必読の書とも言われ、後世の文学に与えた影響は大きい。

参考文献

※ 教師用

▽注釈書

日本古典全書「竹取物語　伊勢物語」南波浩
朝日新聞社　昭三十五
校注古典叢書「伊勢物語」片桐洋一他　明治書院　昭四十六
「伊勢物語全釈」森本茂　大学堂書店　昭四十八
「伊勢物語全訳注」（講談社学術文庫）阿部俊子
講談社　昭五十四
「新版伊勢物語」（角川ソフィア文庫）石田穣二
角川学芸出版　昭五十四
新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」片桐洋一他　小学館　平六
新日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語」秋山虔他
岩波書店　平九
新潮日本古典集成「伊勢物語」〈新装版〉渡辺実　平二十九

▽研究書

「伊勢物語に就きての研究」（校本篇・研究篇）池田亀鑑
大岡山書店　昭八・九　同復刊　有精堂　昭三十三
「伊勢物語に就きての研究」（補遺篇・索引篇・図録篇）
大津有一　有精堂　昭三十六
「伊勢物語の研究」（研究篇・資料篇）片桐洋一
明治書院　昭四十三・四十四
「平安文化史論」目崎徳衛　桜楓社　昭四十三
「伊勢物語総索引」大野晋・辛島稔子編　明治書院　昭四十七
「伊勢物語生成序説」市原愿　明治書院　昭五十二
「伊勢物語の新研究」片桐洋一　明治書院　昭六十二
「伊勢物語私記」金田元彦　風間書房　平二
「伊勢物語と古典文学」福井貞助　風間書房　平十二
「伊勢物語の文芸史的研究」原国人　新典社　平十三

▽入門書・研究案内

鑑賞日本古典文学「伊勢物語　大和物語」片桐洋一
角川書店　昭五十
図説日本の古典「竹取物語　伊勢物語」片桐洋一
集英社　昭五十三
鑑賞日本の古典「伊勢物語　竹取物語　宇津保物語」藤岡忠美
尚学図書　昭五十六
研究資料日本古典文学「物語文学」大曾根章介
明治書院　昭五十八

❊生徒用

「伊勢物語」（岩波文庫）大津有一　岩波書店　昭三十九
「恋する伊勢物語」（ちくま文庫）俵万智　筑摩書房　平七
「文法全解　伊勢物語」（古典解釈シリーズ）雨海博洋
旺文社　平八
「伊勢物語」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）
坂口由美子　角川学芸出版　平十九
「伊勢物語」（笠間文庫　原文&現代語訳シリーズ）永井和子
笠間書院　平二十
「NHKまんがで読む　古典伊勢物語」細村誠
金の星社　平二十三
「心にグッとくる日本の古典」黒澤弘光・竹内薫
NTT出版　平二十三
「現代語訳　竹取物語　伊勢物語」田辺聖子

岩波書店　平二十六
「伊勢物語」在原業平　恋と誠（日経プレミアムシリーズ）
日本経済新聞出版　令二

図版解説

〈燕子花図屏風〉

根津美術館蔵。江戸時代前期（一八世紀）。屏風。紙本金地着色六曲一双。尾形光琳（一六五八〜一七一六）筆。「伊勢物語」九段「東下り」で、燕子花の名所、八橋にて詠まれた和歌を背景に、燕子花の群生を、隻の対象も計算しつつ、濃淡の群青と緑青によって強烈に描く。物語の登場人物を描かずに、象徴となる背景や持ち物・小道具などの意匠によってその作品を表現する技法を留守模様と言う。⇩ P 57

〈伊勢物語絵巻（模本）〉

東京国立博物館蔵。天保九年（一八三八）成立。絵巻。三巻。狩野晴川院養信（一七九六―一八四六）らによる完本の模本。「芥川」の場面は中巻第六図。女を背負って芥川を行く景、暗雲雷鳴の中、女を隠し入れた建物の前で弓を背負って戸口を守る景、鬼が女を食われるのを見て驚き嘆く景の、三つの場面を一つの異時同図として描いている。⇩ P 58〜59

〈伊勢物語図屏風〉

大和文華館蔵。江戸時代中期。六曲一双。金地着色。右隻に三河の国の八橋に咲くかきつばたを眺めながら都をしのぶ一行が、左隻には紅葉の布引の滝を訪れて歌を詠む一行の光景が描かれている。⇩ P 61

〈業平東下り図〉

五島美術館蔵。江戸時代前期（一八世紀）。一幅。紙本著色。尾形光琳筆。在原業平と童子、従者の一行が京都から東国へ下る途中、富士山の麓を馬に乗って通過する場面を描く。もとは六曲一双に描かれたうちの一扇で、それを掛軸に改装した作品と言われる。⇩P63

〈奈良絵本『伊勢物語』〉

國學院大學図書館蔵。江戸時代前期。一巻二軸。上軸に五十段分、下軸に二十九段分の絵がある。挿絵は井筒ごしに井戸を覗く幼い男女が描かれる。⇩P65